

2022 年度
環境デザイン学科
カリキュラム外部評価結果報告書

2024 年 3 月
京都芸術大学 芸術学部 環境デザイン学科
カリキュラム評価委員会

目次

| | |
|----------------------|------|
| カリキュラム評価委員会委員名簿..... | p.3 |
| 総評..... | p.4 |
| 評価結果 | |
| I. 理念・目的..... | p.6 |
| II. 学生の受け入れ..... | p.7 |
| III. 教育研究活動 | |
| 1 [教育体制] | p.9 |
| 2 [体系的カリキュラム] | p.10 |
| 3 [教育内容・教育方法] | p.11 |
| 4 [学修支援] | p.12 |
| IV. 学修成果・教育成果 | |
| 1 [学習成果・教育成果] | p.13 |
| 2 [進路状況] | p.14 |
| V. 内部質保証..... | p.15 |

2022 年度

京都芸術大学 芸術学部 環境デザイン学科

カリキュラム評価委員会 委員名簿

委員長：柚木泰彦

(東北芸術工科大学 プロダクトデザイン学科教授／高大連携推進部長)

委員：山畑信博

(東北芸術工科大学 建築・環境デザイン学科教授)

松下佳代

(京都大学 教育学研究科教授)

中川仁

(パナソニック株式会社 デザイン本部 戦略統括室)

総評

今回、京都芸術大学環境デザイン学科の外部評価を振り返って、本学科の教育特徴を一言で言い表すとすれば「普遍性と先進性を両立した教育の体現」と言えるのではないだろうか。

「生活の質を高め、人と環境との豊かな関係を実現する人間を育てる」信念を底流とし、時代を越えて変わらぬ教育姿勢、本質を捉え続ける姿勢は「普遍性」と言える。一方で、外部からの刺激を絶えず教育に組み込み、淀みなく動き続ける姿勢は、常に「先進性」ある教育特徴につながっている。そして、教育の本質がブレることなく、常に最適な手段を求めながら一步先を見据えた教育に挑む熱い思いを感じる次第である。そのようなことを考えながら、以下に、学生の受け入れ、教育研究活動、学修成果・教育成果、内部質保証に関する評価の要点をまとめた。

学生の受け入れについては、アドミッション・ポリシーに基づいて特色ある入学者選抜が行われ、志願者数も堅実な増加傾向にあり、入学定員充足率は適切に管理できている。4年間の学びの特徴を可視化した「学科教育の軸図」を十分に活用している効果とも読み取れること等から「優れた取り組みが見られる」と評価された。

教育研究活動においては、体系的カリキュラム、教育内容・教育方法に特に優れた取り組みが見られ、在学生に対する教育の質が確保されていることがわかる。「学科教育の軸図」のCGイメージや、デザインプロセスを示した「設計ルート」による7つの能力との関連性の可視化は、教職員や学生への共通理解を促すための学科独自の特徴的なコミュニケーション手段として十分に機能している。学生ヒアリングからも「設計ルートガイドブック」等をベースに学科での学びの意義を理解できており、主体性を育む拠り所となっていることが伝わってくる。教員と学生の関係性が非常に良好であることもヒアリングから伺え、双方の信頼関係の元、安心して学べる環境がつけられている。また、ガイドブック項目をチェックリスト化し、シラバスおよびルーブリックに適用し、関係を分かりやすくしている点も大変優れている。

学修成果・教育成果については、学生生活・学習アンケートの総合満足度、所属学科の教育内容および学修支援に対する満足度がそれぞれ高いこと、さらには、学科独自の「キャリアウィーク」をはじめとした学科教員の尽力等の結果として、進路決定率が学部目標の90%を超える96.5%と高いことは、教育および進路の質が高いレベルにあることを裏付けている。卒業時アンケートの進路満足度は94.1%と14学科中1位であり、学生がそれぞれ希望する進路へ進めた結果と高く評価できる。

また、合評会での外部の専門家による批評、意見交流の機会を創出していること、正課外プロジェクトによる社会実装教育やデザインコンペなど学外への挑戦も多く見られることから、実践的な教育に関する内部質保証がなされていると言える。以上のような優れた取り組みが他の学科にも良い影響を与え、大学全体として教育の質向上に寄与していくことを期待する。

上記の基準に加えて、評価委員より「グローバル社会に向けた教育のあり方」に関する意見もいただいた。本学科では、留学生対応をはじめとして、国際交流に関わる意識も高く取り組んでいることがわかる。今後も、海外経験や語学力に関わる教育を重視し、海外視察、交換留学、国際的なコンペへの挑戦等を通して、グローバルに活躍できる若者の育成を目指した教育力を期待したい。

最後に、この外部評価委員会に外部の有識者として快くご参画いただき、的確な評価と有益なご助言を賜った京都大学教育学研究科教授の松下佳代氏、パナソニック株式会社の中川仁氏、姉妹校である東北芸術工科大学デザイン工学部建築・環境デザイン学科教授の山畑信博氏に心より感謝申し上げる次第である。

2024年3月

委員長 東北芸術工科大学教授 柚木泰彦

I.理念・目的

1 学科の教育目標、人材育成目標は大学・学部の理念・教育目標に照らして、適切に設定し、教職員、学生、社会に周知、公表しているか

【評価】4（よく出来ている）

〈理由〉

「京都文藝復興」や「藝術立国」の実現を目指す京都芸術大学の理念や、大学の教育目標である「人類が直面する困難な課題を克服するために、「人間力」と「創造力」を鍛え、社会の変革に役立てることのできる人材を育成する。」に照らし、環境デザイン学科の教育目標は「環境デザインは、社会を支える基盤である「環境」と社会で生きる「人」との豊かで美しい関係を具体的に考え実現します。環境デザイン学科では実践的な設計課題と講義、日本や海外の様々な地域と連携した実務体験を通して、社会が抱える課題を抽出し、デザインの力で解決する方法を学びます。卒業後は、学んだ力を使って社会に働きかけながら、人々の生活の質を高め、よりよい未来をつくりだせる、自立した社会人を目指します。」と定められている。

社会と環境と人との関係性を、デザインの力で解決すると掲げられており、学科の教育目標、人材育成目標は大学・学部の理念・教育目標に照らし適切に設定されているといえる。

学科の教育目標は、学則及び「在学生専用サイト」、学生募集パンフレットなどで学生に公表し、年1回の「講師会」を通じて教職員に公表されているが、大学ウェブサイトには公開されていない。広く社会に周知できる場所に公表するのが望ましい。また、学生が実際にどの程度認知しているかなどのデータも収集してはどうか。

工学部の建築学科ではなく、芸術学部にある環境デザイン学科であることを強みとし、「定常化社会」や「脱成長社会」における芸術の価値を高らかに掲げ、それが学科の教育目標や人材育成目標とどのように結びついているかが丁寧に論じられており、説得力があり評価できる。

II.学生の受け入れ

1. 求める学生像および入学者選抜の基本方針（アドミッション・ポリシー）を明示し、公正かつ適正に学生募集および入学者選抜を行っているか

【評価】 5（優れた取り組みが見られる）

〈理由〉

京都芸術大学のアドミッション・ポリシーは、「京都芸術大学芸術学部のディプロマ・ポリシーおよびカリキュラム・ポリシーに掲げる「創造力」「人間力」、およびそれらを構成する「7つの能力」を身につけようとする意欲と素養を持った人の入学を期待しています。」と求める学生像が掲げられ、どのような能力や態度を求めているかについては、学力の三要素に照らし記載されており分かりやすい。アドミッション・ポリシーは、大学ウェブサイトのほか、学生募集要項等の複数の媒体で公表され、オープンキャンパスや説明会等で繰り返し周知されている点は評価できる。

入学者選抜の方法としては、「総合型選抜（体験授業型入試／科目選択型入試／面接型入試）」と「一般選抜（科目選択型入試／大学入学共通テスト利用型入試）」があり、多様な学生を選抜する方法となっている。アドミッション・ポリシーに沿った入学者を受け入れるため、各入試において指標に基づいた選抜が行われ、入学定員充足率も適切に維持されていることが分かる。

〈優れた点〉

- 「体験授業型入試」では、単に学力やデッサン力等のみで選抜を行うのではなく、入学後4年間の学修の要点を課題に反映させ、求められる能力要素を総合的に評価しており、高く評価できる。
- 「体験授業型入試」の入学予定者に対しては、「入学前学習プログラム」が用意されており、入学後に必要な基礎力を養うよう教材が用意されている。また、ICTを活用した課題提出等、入学予定者の負担を軽減を図る工夫もなされており、優れた取り組みと言える。

〈参考意見〉

- 入学者に求める資質・能力の三項目は、いわゆる学力の三要素となっており、本学の特徴を十分示しているとはいえない。冒頭の求める学生像に特長が表れており、態度のところに含めるとより良いのではないか。
- 「入学後の学修状況等からみた入学者選抜の妥当性の検証」については、非常に重要なデータであり、このような検証が行われていることは重要だが、分析にはやや不十分な点が見られる。
- グローバルに活躍する人材の輩出も社会の重要課題である。留学生や外国籍学生のデータについても検証や施策の検討がなされても良いのではないか。

2. 学科魅力（特色）には訴求力があり、適切な入学者数を確保できているか

【評価】4（よく出来ている）

〈理由〉

環境デザイン学科の教育内容を「人が生きる、すべての場所をデザインする」と表現し、学科の専門分野を「建築」「インテリア」「ランドスケープ」の3つにまとめ具体的に示すことで、受験生にとってわかりやすく提示できているといえる。

学科教育の特色を「学科教育の軸図」としてCGイメージ図や立体図といった形で可視化し、学科教職員、在学生、受験生・保護者に共有している点は素晴らしい。この軸図は、学科で重視されている哲学と芸術を融合させたものであり、1年次から4年次までの学修の進行と、そのなかで獲得される能力とを視覚的に示したものとなっている。この「学科教育の軸図」を、オープンキャンパス等の場面でも発信し繰り返し伝えていることは、受験生にとって学科の学びを理解するのに効果的であり、その結果が、志願倍率の維持や安定した入学者数の確保につながっていると考えられる。

オープンキャンパスに参加した高校生が、どの程度「体験授業型入試」を受験したかを示す「体験授業型オープンキャンパスの出願率」や、そこからの入学手続き率、さらには全入試の志願者推移など、5年間の経年推移も分析されている。出願者が減少した年度においては、「学科独自イベント」「独自ツールの作成」「主要高校への独自アプローチ」等の活動も速やかに行われており、適切な入学者確保のための努力がなされている。

III.教育研究活動

1 [教育体制]

【評価】 4 (よく出来ている)

〈理由〉

環境デザイン学科の教育内容である、建築、インテリア、ランドスケープの3つの分野、建築、住宅、まちづくり、インテリア、家具、ランドスケープ、庭園といった7つの領域に対し、広範囲の学びを教授できる教員体制となっている。また、専任教員でカバーできない領域については、非常勤教員として実務家教員が多く雇用されており、そのことは、建築士受験資格に求められることに応えていくだけでなく、社会において社会課題を解決していく人材を育成するために有効であるといえる。

教員の職務領域は、教育、学生支援、大学運営、研究制作・社会貢献の4つに分けられていることも特徴的である。本来であれば、教育、研究、大学運営、社会貢献となるが、学生支援の重視、研究と制作の等価性、研究制作が社会貢献であるという認識が見てとれる。

教育の職能開発については、大学が用意するFD研修を活用しているほか、「授業改善アンケート」結果を活用した授業運営の改善に取り組み、2022年度には改善対象となる科目がゼロとなるなど、実際に改善できている点は高く評価できる。また、演習科目を複数教員で担当し、学科会議で授業内容を共有するほか、日常的な申し送りもなされ、学科独自のFD活動としても機能している。

学修環境については、学年毎のホームルーム形式を採っており、学生が落ち着いた環境で学修や制作に取り組めることはもちろん、学生同士の学び合いを促す仕組みとして機能している。学生一人あたりの教室面積は少なめであるが、共通工房である「ウルトラファクトリー」や木工室などを積極的に活用するなど、制作環境整備の工夫が見られる。

2 [体系的カリキュラム]

- ① DP とカリキュラムとの関連（教育目標との整合性、スコープ）
- ② CP とカリキュラムとの関連（順次性・系統性、シーケンス）
- ③ 教育研究目的（学術分野）に対する教育内容・水準の適切性

【評価】 5（優れた取り組みが見られる）

〈理由〉

大学が定めるディプロマ・ポリシーに掲げられる「人間力」と「創造力」、及びそれらを構成する7つの能力が、学科の特徴にあわせ具体的に示されている。またそれがお題目に留まらず、「学科教育の軸図」として示されている点が評価できる。

「学科教育の軸図」では、「情報収集→思考（試行）実験⇄検証→決断→定着」というデザインプロセスを「設計ルート」として示し、この「設計ルート」の各段階で7つの能力がどのように関連するかを記載している。「学科教育の軸図」は、これが、現状の問題点と指導方法、学生が身につける力の可視化に大きな役割を持っており、常に俯瞰し確認することができる。さらには、「学科教育の軸図」をCGイメージで作成し、学科教育を構成する諸要素を直感的に分かりやすくまとめてあり、教職員や学生の共通理解を促している。

カリキュラム・ポリシーは、各科目の編成方針・内容が、初年次教育、芸術教養科目、学科専門科目、進路教育について具体的に書かれている。卒業論文・研究などを、カリキュラムの到達点としてディプロマ・ポリシーと紐づけている大学は多いが、環境デザイン学科の「卒業研究・制作」の目的、到達目標は、「4年間の学びを統合し、ひとつの表現として昇華させ、制作した作品を展示発表する」「学修の集大成としてふさわしい内容とクオリティの作品を、卒業展で展示発表する」とシラバスに明示されており、到達点として実質的に機能しているといえる。

学科演習は実社会との関りを意識して基礎から応用へと段階的に組み立てられている。初年次演習は、基礎的なスキルを前倒して修得されるよう2020年度に変更されているが、1年次前期末の住宅設計課題の秀作合評でも外部講評者から好評を得るなど、効果が表れている。

また、建築、住宅、インテリア、家具、ランドスケープ、庭園、まちづくりという7つの領域から自分に適した進路を、4年生のゼミ分けで選択できるという「レイト・スペシャリゼーション」を採っているのは本学科の特色といえる。レイト・スペシャリゼーションは卒業までに専門を深められないという懸念点もあるが、本学科では「卒業研究・制作」において複合的な領域を総合した作品として結実しているなど、それが上手く機能しているといえる。

〈優れた点〉

- 「学科教育の軸図」を用いて、学科教育が俯瞰できる点は優れた点といえる。学生とのヒアリングにおいても、学生自身が「学科教育の軸図」や後述する「設計ルートガイドブック」を用いて学科での学びを説明することができているなど、学生にこれらの考え方が浸透し、実際の学習経験と併せて理解できている点は、非常に高く評価できる。

○正課においては課題合評や卒業展の講評といった場面で、外部評価を参照する機会を設けている。また、正課外プロジェクトとして「StamP! プロジェクト」、「門司港アートのまちづくり」といった社会実装教育が行われており、広く社会からのフィードバックを得る機会となっている。このように積極的に外部評価を参照する機会を設けていることも本学科の特色であり優れた点といえる。

3 [教育内容・教育方法]

- ① シラバスに基づいた授業の実施
- ② 成績評価
- ③ 単位認定
- ④ 教育方法の工夫・開発と効果的な実施

【評価】 5（優れた取り組みが見られる）

〈理由〉

シラバスは、大学が定める「シラバス作成の手引き」に従い作成されているとともに、建築士受験資格との関連が分かるよう、ピアチェックを通じて確認が行われている。成績評価や単位認定についても、大学が定める「成績評価に関するガイドライン」に基づき、厳格に行われている。

「学科教育の軸図」で示したデザインプロセスである「設計ルート」を、さらに詳しく解説した「設計ルートガイドブック（以下、ガイドブック）」を作成し、活用している点は本学科の特色を生かした極めて優れた取り組みである。マンガを用いて学生に親しみやすくしているだけでなく、「情報収集、思考（試行）実験⇔検証、決断、定着」の4つのフェーズが具体的に詳述されており、充実した内容となっている。加えて、ガイドブックの各項目を「ガイドブック項目表」としてチェックリスト化し、シラバスおよびルーブリックに落とし込まれている点も、関係が分かりやすいものとなっている。

卒業研究・制作では年3回の中間発表を行い、「設計ルート」に基づき、「テーマ・情報収集」発表、「仮説・検証ループ」発表、「決断」発表とするなど、節目節目でレビューの機会を設け、学科教員全員で指導する体制が定着している。

上級生の講評会には下級生も自由に出入りできるなど、オープンなスタイルで、学生間の交流を引き出すような授業運営の工夫がなされている。また、実際に授業を見学したが、教員が学生の長所を引き出すような講評に努めており、ティーチングではなくコーチングで学生に向き合う姿勢が印象的であった。

〈優れた点〉

○前述したとおり、「設計ルートガイドブック」は非常に優れた取り組みである。またガイドブックを作成しているのが本学科の卒業生であり、海外の建築学科の大学院に在学していることも素晴らしい。キャリア教育の面からはロールモデルでもあり、「設計ルート」が海外

の大学院生にも通用する普遍性を持つことを示す役割も果たしている。また、参考文献も挙げられており、さらに学ぼうとする学生にとって役立つ文献ガイドにもなっている。

4 [学修支援]

- ① 学修支援体制
- ② キャリア支援

【評価】4 (よく出来ている)

〈理由〉

学生の学修や学生生活をサポートするため、1年毎に担当教員を置き、前期後期の履修登録時の履修面談や、各学期毎の生活指導面談を行っている。GPAが偏らないよう学生を割り振るなど、教員負担が偏らないよう工夫もされている。面談は、学生が話しやすいよう雑談も交えながら行われていることや、担当教員以外の教員とも話せる機会があり、安心して学べる環境に繋がっていることが学生ヒアリングから見てとれた。学科教員による手厚い学修支援がなされていると評価できる。

「設計ルートガイドブック」や「学科教育の軸図」等は日常的に活用されており、学修支援の面からみても、学生の主体性を育む上で大きな拠り所となっていることが分かる。

交換留学生に対するバディ制度や、障がい学生への支援等も、FD研修を活用しながら常に理解を深め、進化されている点も良い。

キャリア支援については、①正課科目、②担当教員制による3年次からのキャリア指導、③キャリアデザインセンターによる講座等、という3通りのチャンネルで行われている。とくに学科独自に開催する「キャリアウィーク」では、約2週間にわたり、放課後や授業のない曜日に建築やインテリア、造園等の企業を招いた企業説明会が行われており、実践的で非常に特徴的な取り組みであるといえる。一般大学では③のキャリアデザインセンターによる支援が中心となるが、①の正課科目や②の担当教員による指導も行えるところが、芸術大学ならではの強みだろう。

〈参考意見〉

○学生自らが主体的に学べるガイドとして、「設計ルートガイドブック」や「学科教育の軸図」と「軸図CG」が用いられている点はきわめて優れた点といえる。さらに欲をいえば、学生たちが実際にこれらをどのように使っているのかという実態が分かるとさらに良い。

IV.学修成果・教育成果

1 [学修成果・教育成果]

- ① 教育内容・学修指導「学生生活・学習アンケート」
- ② 教授力 授業改善アンケート
- ③ 初年次教育力「1年次離籍率」
- ④ 標準修業年限での卒業率
- ⑤ カリキュラムの各段階に応じた目標達成度

【評価】4（よく出来ている）

〈理由〉

教育内容・学修指導については、「学生生活・学習アンケート」の総合満足度、所属学科の教育内容に対する満足度、所属学科の学修支援に対する満足度のいずれも90%前後を維持している。詳細を見ると、「満足」「どちらかという満足」のポジティブ評価のうち、「満足」は2020年度から2022年度にかけて上昇しており、学科の教育内容・学修指導の結果であると評価できる。コロナ禍を経て、ICT教育環境がよりよく整備されたことも分かる。

教授力については、Ⅲ-1でも述べられていたが、改善対象となる授業科目が減少しており、着実な改善がなされていると評価できる。ただし、2022年度後期については「授業改善アンケート」の回収率が低いため、今後の改善が求められる。

1年次離籍率や標準修業年限での卒業率は安定しておらず、これらを望ましい状態にするには、ミスマッチを減らすための学生募集活動も大きな影響を持つと考える。

カリキュラムの各段階に応じた目標達成度では、成績評価の分布について、演習系科目でS+A評価が30%を超える授業が散見される。これについては、初年次科目等、科目の特性によって評価基準を超えることはあるが、1～4年次まで総合的にみると大学が定める成績評価基準が守られているということであった。

PROGテストについては、社会で求められる汎用的な能力・態度・志向の成長を測る良い取り組みであるが、芸術系の特徴を考えたときに必ずしもすべてを測定できるものではないのではないか。活用の方法については検討の余地があるだろう。

「卒業研究・制作」は、「設計ルート」の4つのフェーズがしっかり具体化され、学生が利用、修得していることが分かる。成果としても外部の賞を受賞するなど、一定の成果が表れているといえる。

〈参考意見〉

- 何をもって「学修成果・教育成果」の評価を行うかについては、大学のアセスメント・ポリシーに基づき、再整理が必要だろう。

2 [進路状況]

- ① 人材育成目標に対する達成状況
- ② 進路決定率と進路指導の改善
- ③ 進路の質向上のための学部目標の達成状況

【評価】 5（優れた取り組みが見られる）

〈理由〉

進路決定率、早期内定率、正規雇用率、就職先分布状況、卒業時アンケートといったアセスメント・ポリシーの指標に基づき分析がなされているが、2022年度の進路決定率は、学部目標の90%を超える96.5%となっており、高い成果が出ている。直近5年間をみても、2020年度と2021年度は目標に届かなかったが、概ね90%前後の結果となっており良好である。2022年度の早期内定率、正規雇用率についても学部目標を達成できているなど、各指標が高い水準で達成されており、学科教育がしっかりと社会の各分野に接続していると評価できる。加えて、卒業時アンケートの進路満足度は94.1%と14学科中1位であることから、学生がそれぞれ希望する進路へ進めた結果であると推察される。

就職先分布状況は、2021年度卒業生の結果をみても、概ね学科が理想とする進路先へ就職できたことがわかる。進路の質向上ということを考えると、学生の志望はもちろんのこと、学科としての理想の進路先を中長期で描いておく取り組みは重要だろう。また、2021年度は「その他」としていた進路先を「環境デザイン総合分野」と名称変更することにより、学科での学びが社会の幅広い領域で活用できることを学生に伝える表現となったことも良い。活躍の場があるというモチベーションに繋がっているのではないか。

環境デザイン分野の進路として、職能はイメージしやすくとも、就職先企業の情報が集めにくいことが課題であると分析し、「キャリアウィーク」という学科独自のキャリア支援を行っている。3年次のインターンシップ参加率の高さ、さらには「キャリアウィーク」に参加することが、4年次の就職活動にスムーズに繋がり、結果として2022年度の進路決定率に結実したといえる。

〈優れた点〉

○2022年度卒業生の進路決定率と進路満足度が非常に高く、学生が志望する進路が実現されたことが分かる。2020年度、2021年度と進路決定率が学部目標に届かなかったが、学科独自の「キャリアウィーク」を開催することにより、2022年度には改善することができた。これは、データを集め、分析し改善するという教育改善に繋がった好例であると高く評価できる。学生の就職意欲や就業してからのイメージ構築のために、卒業生や非常勤講師との触れ合いの場を多く提供していることも非常に好感を持てる。

V.内部質保証

【評価】4（よく出来ている）

〈理由〉

授業科目レベル、教育課程レベルで、学修成果・教育成果の検証が行われている。検証は、指標についての数値に留まらず、演習課題ごとに設ける講評会や、年に2回実施する全学年を集めた「優秀作合評」の場で学生に成果を発表させ、学科教員だけでなく外部講師を招いた学修成果の評価を行っていること、またその講評によって、他大学と比較して本学科の特徴や課題についての気づきを得ていることは、実質的な教育のカリキュラム評価として内部質保証が機能しているといえ、高く評価できる。

また、実務家教員が多く、非常勤講師の割合が高いが、教員間で授業の引き継ぎを行い、学生の学修状況や課題進捗状況についての理解が共有されている点、教員間や講師会等でプログラムレベル（学科単位）での評価結果がすぐに共有され、改善に取り組める体制ができている点も優れている。

学部の方針等は、「代表教授会」で共有されているが、環境デザイン学科では、全専任教員が「代表教授会」に出席するようしており、それにより速やかな情報共有とスムーズな学科運営が実現できている。

以上